

地域素材を活用した総合的な学習の実践

一日野を自慢しよう

西野 雄一郎* 中野 真志**

* 滋賀県日野町立日野小学校 ** 愛知教育大学 生活科教育講座

A Practice of Integrated Study Utilizing Local Resources

Yuichiro NISHINO* Shinji NAKANO**

* Hino Elementary School, Gamogun 529-1604, Japan

** Department of Life Environment Study, Kariya 448-8542, Japan

I はじめに

平成20年1月の中央教育審議会の答申に基づいて、学習指導要領の改訂が行われた。『小学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編』において、改訂の趣旨が以下の様に記されている。「総合的な学習の時間の実施状況を見ると、大きな成果を上げている学校がある一方、当初の趣旨・理念が必ずしも十分に達成されていない状況も見られる。(中略)総合的な学習の時間については、その課題を踏まえ、基礎的・基本的な知識・技能の定着やこれらを活用する学習活動は、教科で行うことを前提に、体験的な学習に配慮しつつ、教科等の枠を超えた横断的・総合的な学習、探究的な活動となるよう充実を図る。」¹⁾

上記のように、総合的な学習の時間において充分に取り組まれていない現状がある。また、総合的な学習の実践の質を高めるべく、教科等との関連の必要についても言及されている²⁾。

学習指導要領の改訂に伴って平成23年度より、総合的な学習の時間が各学年において年間70単位時間へと縮減された。子どもたちに生きる力を身に付けさせるべく、質の高い総合的な学習実践を行うための時数を確保するならば、教科等の枠を超えた学習活動を展開していく必要がある。

そこで本小論では、まず、地域素材を活用し、教科との関連を図った総合的な学習の実践事例を述べる。関連教科は国語科と社会科である。特に児童の実態に応じて国語科の「A 話すこと・聞くこと」を意識した「自己表現能力の育成³⁾」を目指した。次

に本実践を分析・考察した上で、今後の総合的な学習の時間や、それを実践する教師の在り方について論じる。

II 実践の概要

1 単元名：「日野の自まを広めよう」

【単元目標】

- 課題設定やグループでの話し合い、インタビューなどの活動を通して、主体的に学習する方法を学ぶ。
- 地域の人々へのインタビューや町探検を通して、地域の良さを発見すると共に、自分の町に愛着を持つ。
- 調べたことを2年生や保護者、地域の人々に発表することを通して、自己表現能力を身に付ける。

2 児童の実態

日野町立日野小学校の3年生は3クラスから成り、男子46名、女子50名、合計96名の学年である。

授業では、普段から積極的に手を挙げる子どもが多く、自信のあるときには「先生、絶対にあてて!」と言わんばかりに手を挙げる。しかし、少しでも長い説明が必要な発問や自分の思いを語らなければならない場面になると、手を挙げるのが劇的に減ってしまう。そのような状況では多くの子どもは恥ずかしがったり、自信を持てなかったりして手を挙げなくなってしまうのだ。また、せっかくがんばって手を挙げたとしても、声がだんだん小さくなっていき、最後まで言えずにもじもじしてしまったり

する傾向にある。

3 単元特性

本学区は、魅力的な素材の宝庫である。日野小学校の所在地である日野町は、戦国武将の蒲生氏郷ゆかりの地であり、多くの文化や伝統、名産品が存在している。氏郷や伝統行事である日野祭り、日野商人、火ふり祭り、日野菜、しゃくなげ谷、ほいのぼりなど、子どもたちに馴染みのあるものから、馴染みはないが興味・関心を抱きやすいものまで多く存在している。また、それらの文化や伝統、名産品を伝承していこうとしている地域の方々もたくさんいる。

地域に多くの素材があり、それを教えてくださる方もたくさんいるので、子どもたちが繰り返しかわることが容易になる。子どもたちは、総合的な学習の時間を通して地域の人々とかかわる中で、日野に住んでいる方々の優しさや、文化や伝統に対する思いに触れることができるだろう。また、繰り返し調べ活動をする中で、対象に関する知識が増え、また、思いが高まり、子どもたちは調べたことを発表したくなるだろう。したがって、本単元での活動は、子どもたちが豊かな自己表現能力を身に付けるために適した教材であるといえる。

4 指導計画(26時間完了)

探究1：日野の自まんを見つけよう

(2時間+社会科9時間)

探究2：ボランティアティーチャーからお話を聞こう

(4時間+国語科2時間)

探究3：自分たちの持ったぎ間をかいけつしよう

(9時間+国語科1時間)

探究4：日野の自まんを広めよう

(11時間+国語科2時間)

5 授業の実際

探究1 「日野の自まんを見つけよう」

「他の場所にはない、日野町のとっておきの自慢ってどんなものがあるだろう。」、社会科「わたしたちのまち みんなのまち」という単元の町探検直前に、このような問いかけをしてみた。子どもたちは「日野祭り!」、「日野菜!」、「日野小の子どもた

ち!」など、思いつくものを一しきり挙げてきた。

「みなさんは今日は日野町探検隊です。地図を完成させるだけでなく、日野の自慢もたくさん発見することはできるかな。」このようにして、日野の自慢探しは始まった。

探検は、各学級ごとに列を成して行なった。メモするときや調べたことをまとめるときなどに使用する「べんりシート」を探検ボードに挟んで、子どもたちは町に繰り出した。歩いているときにはメモをとることはできないので、決められた場所で立ち止まり、メモをとる時間を与えた。

学区を探検するだけで様々な素材に出会う。日野祭りの曳山が入れられている倉庫、祭りを見るために作られた栈敷窓、日野商人に関係のある物や写真が展示されている日野商人館など、なるべく日野の自慢になりそうな物がある道を意図的に探検した。そして、それらの前を通るときには、一度立ち止まって話をした。「先生、さじき窓やで、さじき窓、めっちゃあるやん!」そう言ったのは、普段なかなか授業に積極的に参加できず、発表も苦手な子どもだった。他の子どもも口ぐちに説明してくれる。「この道を日野祭りのときに曳山が通るんやで!」「さじき窓からのぞいて曳山を見やるんやで」と。教室に戻った後のまとめの時間には、発表の苦手なその子どもが、「ぼくがすごいと思ったことは、さじき窓の数を数えたら、なんと20こよりもたくさんあったところですよ」と、生き生きと発言することができた。発表や自己表現が苦手でも、自分が興味を持っており、「他の人に話したい!」と思ったことなら、子どもたちは堂々と発表できるのではないかな。そう思えた瞬間だった。このように町探検でそれぞれが見つけてきた自慢を交流することにより、日野祭りや日野商人など、日野の代表的な伝統・文化について共通理解をすることができた。

夏休みには、子どもたちは宿題でお家の人に日野の自慢をインタビューして来た。夏休み明けの総合的な学習の時間において、インタビュー結果を学級で交流することで、日野には蒲生氏郷という立派な武将がいたことや、しゃくなげ谷が天然記念物であることを初めて知った子どももいた。

探究2 「ボランティアティーチャーからお話を聞こう」

T:「栈敷窓のようなものがあるなんて、先生は初めて知ったのですよ。日野には魅力的なものがたくさんあって、うらやましいわー。」

C:「先生も知らなかったんー。」

T:「知っている人なんて、意外に少ないですよ。日野の良さを知らない人がいるなんて、もったいないよね。いっぱい調べて教えてあげたら、絶対に日野が好きな人が増えますよ。先生も好きになったもん。」

C:「調べたい、調べたい！」

上記は、探究1における学区探検のまとめの時間の教師と子どもたちのやりとりである。このような話があったことを他のクラスにも担任から伝えてもらい、「日野の自慢を広めるプロジェクト」が発足した。子どもたちの調べたいことに従って、日野祭り、日野商人(日野商人館)、日野菜、蒲生氏郷、ほいのぼり、火ふり祭り、しゃくなげ谷の7つのテーマ別グループを設定し、さらにテーマごとに4〜6人の小グループに別れて調べ活動を行うことにした。

子どもたちはまず、博士になるための計画を立て始めた。しかし、計画を立てるといっても、調査方法すら子どもたちには思い浮かばない。そこでまず、調べたいテーマ別にボランティアティーチャーからお話を聞くことになった。

ボランティアティーチャーのお話を聞くときには、しっかりとメモをとり、日野の自慢を広める発表資料を作るときの材料にできるようにした。ここで、国語科「話を聞いてメモをとろう」との関連を図った。例えば、大事なことを短い言葉で書いていくことや話のまとまりごとに見出しを付けていくことなどを国語科の教科書を用いて指導した⁴⁾。

ボランティアティーチャーに学校まで来てもらったグループもあれば、日野商人のグループのように、日野商人館まで出向いてインタビューをしに行くグループもあった。「先生！日野商人館に、昔の物がいっぱいあったで！古い電話機も見せてもらった！」と、興奮気味に帰ってきた子どもたちがほとんどだった。

子どもたちのべんりシートを見ると、国語科の授業で習ったことを活用しているものも多く見られた。資料1は、日野祭りについてのお話を聞いた子ども

のべんりシートから一部抜粋したものである。

○日野祭り

- ・800年前からある。
- ・おちごさんはぜったい上野田の子から出る。

○ひき山

- ・16きある。
- ・一番大きいのは西おおじのやつ。
- ・中の人かふえやたいこをする。

○さしきまど

- ・タイそうめんを食べながらすわる。
- ・ふだんはかたづけている

(資料1)

資料1を見ればわかるように、この子どもは、聞いたことを短く書くことができている、話題ごとに見出しも付けることができていた。国語科「話を聞いてメモをとろう」において、教科書には、先生の話子どもたちがメモする展開が書かれているだけである。この単元を探究2と関連させることによって、先生の話メモする技能を、地域の人からの話をメモする技能へと応用する機会を持つことができた。

その日の振り返りの時間の発言や日記には、以下のようなものがあつた。

- ・日野祭りは曳山が16基も出るなんて、すごく多いと思った。
- ・火ふり祭りは、お米がいっぱいとれるためのお祭りだそうです。バンバラ竹も見せてもらい、ぼくも作ってみたいと思った。
- ・日野菜工場に見学に行きたい。
- ・蒲生氏郷は、14歳から戦に出た、戦いのプロだということがわかって、すごと思った。
- ・わたしは、ほいのぼりは近くで見たことなかったけど、近くで見たらきれいでした。ほいのぼりを作っているところが見たいです。
- ・日野商人が、万病感応丸(日野の伝統薬)を作っていることを、初めて知ってびっくりした。どこで売っていたのかを調べたい。
- ・しゃくなげの写真をいっぱいくれて、西村さんはすごいいい人だった。しゃくなげ谷はなんで天然記念物になったんだろうかと思った。

ボランティアティーチャーから話を聞いたことで、

子どもたちの中で知りたいことや気になることが焦点化されてきたようだった。

探究3 「自分たちの持ったぎ問をかいけつしよう」

子どもたちは次の時間にグループごとに計画を立て、さらにその次の時間から活動を始めた。ここでは、筆者が調べ活動に同行し、子どもの姿を実際に見取ることができた、火ふり祭りを調べたグループの活動を記述する。

火ふり祭りを調べるグループは、4人で1組の小グループが3組あり、計12人で成り立っていた。4人ずつの小グループに分けたのは、一人ひとりの役割をより重要にするためである。

子どもたちはまず、それぞれが火ふり祭りについて調査したいことを話し合った。ある子どもは火ふり祭りに使われるバンバラ竹の作り方を知りたいと言い、またある子どもは、なぜたいまつを松の木めかけて投げるとかを知りたいと言った。探究2を経て、自分が調べたいことが明確になっていたのも、それぞれが自分のやりたいことを同じ小グループの子どもたちに伝えることができた。

次に子どもたちは、調査方法について話し合った。どの小グループも、探究2でボランティアティーチャーとして話をしてくれた矢島さんにインタビューをすることを希望した。

火ふり祭り以外のいくつかの調査グループも、ボランティアティーチャーへのインタビューを希望していたので、国語科「インタビューをしよう」の授業を行なった⁵⁾。インタビューをする時には、①まずあいさつをして、何を聞くために来たのかを伝えることや、②ていねいな言葉遣いで話すこと、③短い言葉でメモをとること、④質問したこと以外にも知りたいことが出てきたら、話の区切りで質問することなどを指導した。

調べ活動の当日、子どもたちは火ふり祭りのスタート地点である五社神社に行き、矢島さんと会った。五社神社に集合しようと提案したのは矢島さんである。子どもたちにできるだけ火祭りについてイメージしてもらえるように、実際に祭りが行われる場所を案内したいということだった。

まずはインタビューをする時間をとった。「矢島さ

ん、今日はお忙しい中ありがとうございます。3年1組の〇〇です。火ふり祭りについて質問してもいいですか。バンバラ竹はどうやって作られるのですか。」初めにインタビューをする子どもは、国語科で学んだ成果を発揮して、あいさつとインタビューを続けてすることができた。他の子どもたちもインタビューをしっかりとすることができ、メモをとることもできていた。矢島さんは、一つひとつの質問に丁寧に答え、バンバラ竹の作り方も実演してくれた。事前の打ち合わせで、子どもたちの質問を前もって伝えていたので、矢島さんはバンバラ竹を準備することもできたのである。

インタビューが一通り終わった後、矢島さんは五社神社の中を案内してくれた。火ふり祭りの行列が最初にたいまつを受け取る場所や、神社の敷地内を歩くルートなどを教えてくれた。

矢島さんが火ふり祭りについて教えてくれている中で、子どもたちは用意していた質問とは違った疑問や知りたいことが出てきたようである。「たいまつも、手作りなんですか」、「火ふり祭りの時の服装はどんなですか」など、国語科の時間で学んだことを生かして何人かの子どもが新たな質問をすることができた。

たくさんの質問に答えてくれた矢島さんは、たいまつを子どもたちと一緒に作ったり、実際に火ふり祭りの服を着させてくれたりもした。矢島さん自身、火ふり祭りのことを子どもたちに教えたいという思いを強く持っておられたようで、こちらが思っていた以上の準備をしてくれていた。



矢島さんにバンバラ竹を作ってもらったよ！

やや興奮気味に帰ってきた子どもたちは、壁新聞を作った後、火ふり祭りの行列が歩く道順をたどる計画を立て始めた。

子どもたちは矢島さんの人柄や火ふり祭りに対す

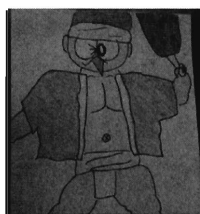
る思いに触れ、火ふり祭りに対する関心がますます増したようである。「先生、矢島さんってほんまに博士やな。すごいな。」と伝えに来る子どももいれば、「矢島さんに、今度の火ふり祭りのときに会う約束したで」と嬉しそうに言っている子どももいた。またある子どもは、後の発表で「今年の火ふり祭りには、僕もバンバラ竹を持って参加します！」と、決意表明していた。

調べ活動ができる時間は2時間ずつで3回しかとることができなかった。しかし、べんりシートに書かれていることや、子どもたちからの報告によると、放課後や休日を使って町へ繰り出す子どももたくさんいたようである。例えば蒲生氏郷について調べていたグループは、休みの度に、ボランティアティーチャーの振角さんを訪ねたり、図書館で調べ活動をしたり、蒲生氏郷の銅像を見に行ったりした。氏郷グループの子どもたちは、「氏郷って日本で4番目に偉い人やってんでー」、「けれども、戦の腕は日本1やってんでー」と、得意気に話すようになってきた。

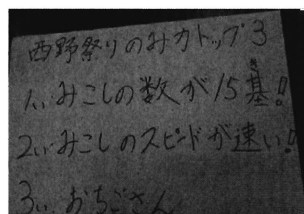
探究4 「日野の自まんを広めよう」

調べ活動を終えた子どもたちは、いよいよ発表のための準備に入る。発表準備の前に、各クラスにおいて、国語科「わたしたちの町の行事をしようかいしよう⁶⁾」の授業を行なった。12時間完了で予定されているこの単元であるが、実際は2時間だけの授業となった。紹介するために行う調べ活動を済ませていたためにその時間を削減することができ、発表原稿の書き方やグループ内での発表の役割分担の仕方、発表するときに気を付けるべきことについて教えるだけで事足りたからである。

しかし、3年生の子どもたちは、どのように発表のための資料を作り、発表に臨むのかということがあまり想像できない。そこでまず、教師が発表の見本を示すことにした。教師は子どもたちの前で、架空の行事である「西野祭り」について発表した。



西野祭りの服



西野祭りの魅力ランキング

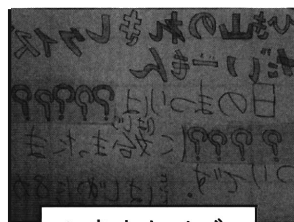
発表するときには、子どもたちに気を付けて欲しい以下の点を強調した。

- ① 大きな声で、ゆっくり話す。
- ② 発表資料で顔が隠れないようにする。
- ③ 絵や写真を使うなどして、聞き手に分かりやすくする。
- ④ 遠くの人にも発表資料が見えるように、大きな字を書く。
- ⑤ 最後に、西野祭りについて調べた感想を話す。

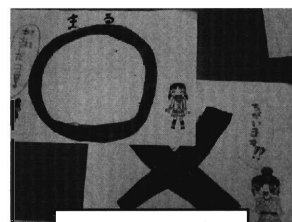
また、発表例を示した後には、クイズやランキング表、紙芝居、ペープサート、劇などの発表方法もあることを伝えた。

発表例を見た子どもの多くは、自分たちの調べてきたことを発表資料にまとめるイメージができたらしく、「早く(発表準備を)したい!」と言っていた。

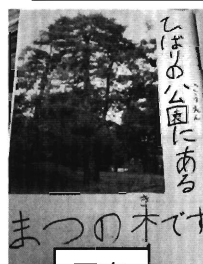
見本を示した時間を含めて計8時間、子どもたちは発表準備と発表練習に取り掛かった。まずは発表資料作りである。子どもたちは、資料2のようなワークシートを用いて、発表のための役割分担や、発表の仕方を計画した。クイズにペープサート、ランキング表に紙芝居など、どのグループも工夫を凝らした発表の仕方を考えることができた。



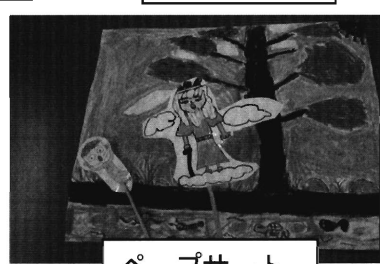
ひき山クイズ



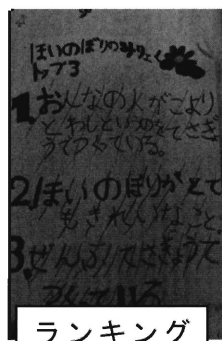
〇×クイズ



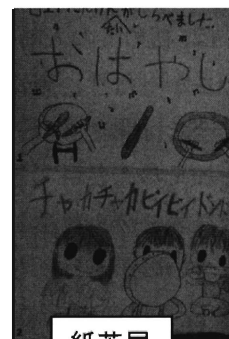
写真



ペープサート

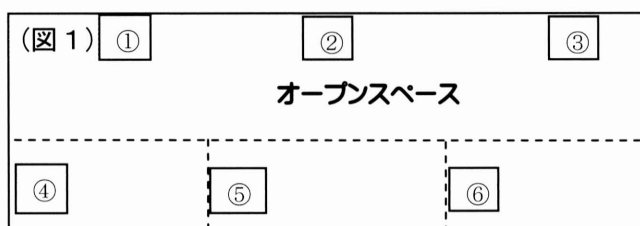


ランキング



紙芝居

発表練習としては、18グループが3グループごとに分かれて、アドバイスをし合う活動を取り入れた(図1)。



アドバイスをし合う発表練習

日野 LOVE プロジェクト 発表計画表

チーム名		
発表する自まん		
役わり分たん (だれが何についてまとめて発表する?)	メンバー	まとめ、発表すること
発表の仕方		
先生に用意してほしい物		
自分で用意する物		

(資料2)

アドバイスを伝える活動である。発表をする子たちの多くは、初めての人前での発表ということもあり、声が小さかったり、発表原稿の棒読みになったりしたが、そこは聞き手の子どもたちがしっかりアドバイスを加えることができた。最初に教師が「西野祭り」で発表モデルを示したことが印象に残っていたのが大きいかもしれない。子どもたちがアドバイスカード(資料3)に記入し、発表者に伝えた改善点

には、以下のようなものがあった。

- ・声が小さいのもっと大きな声で
- ・早口で聞こえないから、もっとゆっくり、はっきりと
- ・画用紙(発表資料)で顔をかくしていたら、声がこっちまでとどかない。
- ・ちゃんとセリフを覚えて、前を向いて話してほしい

6つのブースでアドバイスをし合った後、全体でもこれらの意見を再確認して、共有し合った。子ども同士が相互評価し合うことで、他のグループの改善点だけでなく、自分たちの直すべき所も見えてきたようである。ある子どものこの日の振り返りカードには、「わたしの声も紙(発表資料)にかくれて聞こえにくくなったかもしれないので、本番は、しっかり顔を出して発表します。」と書かれていた。

アドバイスカード

()、()、
()、()の発表を聞いて・・・

①よかったところ

②アドバイス(もうちょっと～したらよくなるよ!という感じで書こう)

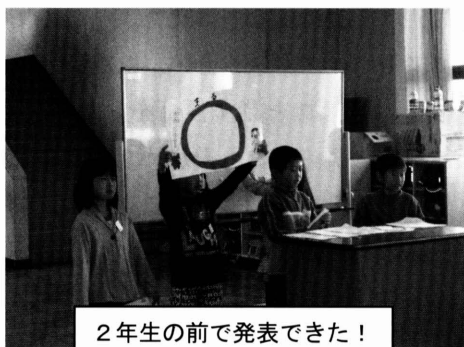
(資料3)

発表練習が終わったら、いよいよ本番である。発表は2年生の前で1回と、保護者とボランティアティーチャーの前で1回の計2回行った。

2年生の前で発表する子どもたちは、発表練習での反省点を生かしたと、調べてきたことを発表できる嬉しさで、たいへん立派な発表をすることができた。

蒲生氏郷を調べてきた女の子は、自分の思いを次のように語った。「私は、氏郷のおかげで今の日野が

あるんだなと思いました。いっぱい調べるのが楽しかったし、氏郷のことが好きになりました。氏郷について調べられて幸せでした。」



また、ある内気な女の子はこの日、同じグループの子どもが欠席したために、一人で2人分の発表をしなければいけなくなった。普段の授業中にも、一度も手を挙げたことのない子どもでもある。けれどもその子どもは堂々と、大きな声で発表することができた。自分の調べたことをちゃんと伝えたいという思いと、この日のために何度も練習を重ねて来た成果であった。

保護者とボランティアティーチャーの前での発表は、子どもたちにとって貴重な経験となった。多くの子どもが未だかつて、大勢の大人の前で発表することがなかったからだ。いつもより早口になってしまい、悔し涙を浮かべる子どももいた。その子どもは、その後の国語の詩の授業で、ゆっくり、相手に聞こえやすい声で読むことを心がけるようになっていった。

Ⅲ 実践の分析と考察

自己表現能力の成長を見取る手立てとして、2つの方法を用意した。一つは子どもたちへのアンケート調査であり、もう一つは実践における子どもたちの姿からの見取りである。まずは、アンケートの内容・結果について記述する。

自己表現能力の要素としては様々考えられるが、本実践では身に付けたい力を下記のように具体的に設定した。

- (1)自分の思っていることを、はきはきと話す。
- (2)工夫して、分かりやすく発表する。
- (3)発表する自信を持ち、いろんな人の前で積極的に発言する。

アンケートは次のようなものを作った。

発表する力についてのアンケート

3年 組 名前()

学校の自まを広めるプロジェクトを始める前と、今では、発表する力がのびたと思うかどうかを調べるアンケートです。①～⑧までの問いに答えて右にある数字に○をつけましょう。

(4…のびた！ 3…のびたかもしれない 2…どちらともいえない 1…のびなかった)

- ① 手をあげて発表することが、前よりもできるようになった。
(4・3・2・1)
- ② 前より、自分の思っていることを、みんなに聞こえる声ではきはきと話すことができるようになった。
(4・3・2・1)
- ③ 前より、発表会などでは、わかりやすくするために工夫して発表することができるようになった。
(4・3・2・1)
- ④ 前より、班やグループでの話し合いのときに、自分の考えを言うことができるようになった。
(4・3・2・1)
- ⑤前より、インタビューのときに、しつ問することができるようになった。
(4・3・2・1)

(資料4)

- | | |
|----------|---------------|
| ①のびた 17人 | のびたかもしれない 8人 |
| ②のびた 12人 | のびたかもしれない 13人 |
| ③のびた 10人 | のびたかもしれない 15人 |
| ④のびた 15人 | のびたかもしれない 12人 |
| ⑤のびた 17人 | のびたかもしれない 7人 |

①の「前よりも手を挙げて発表できるようになった」と実感している子どもは、31人中17人、「おそらく前よりもできるようになった」と思っている子どもは8人だった。②の「前よりも自分の思っていることをみんなに聞こえる声ではきはきと話すことができるようになった！」と実感している子どもは12人、「おそらく前よりもできるようになった」と思っている子どもは13人だった。③の「前よりも発表会などで分かりやすく工夫して発表することができるようになった！」と実感している子どもは10人、「おそらく、前よりもできるようになった」と思っている子どもは15人だった。また、④の「前よりも班やグループでの話し合いのときに、自分の考えを言えるようになった！」と実感している子どもは15人、「おそらく前よりもできるようになった」と感じている子どもは12人だった。そして、⑤の「前よりもインタビューのときに質問ができるようになった」

た！」と実感している子どもは17人、「おそらく前よりもできるようになった」と感じている子どもは7人という結果が出た。

上記のアンケートは、実践を終えた後に実施したものである。本実践の終盤辺りから、普段の授業においての子どもたちの発表の質の変化を見取ることができるようになっていたので、アンケート結果も、予想通りのものとなった。例えば、国語科の読み物教材の単元においても、教材文から読み取った登場人物の気持ちを想像して自分の言葉で発表できる子どもが増えてきた。算数科においても、問題の答えを言うだけでなく、その答えを導き出した理由を発表できる子どもが多くなってきたのである。

実践を通して、たくさんの子どもの成長を見取ることができた。まず、自分の思いを自信を持って語れる子どもが増えた。上述の実践において下線を引いた箇所は、活動の中で「話したい！」という気持ちが芽生え、自分の思いや調べたことを、しっかりと発表できた子どもの姿を表した記述である。例えば、それまで授業中に発表をしたことのなかった上述の女の子は、何としても自分が調べてきたことを発表したいという思いでいたのかもしれない。一緒に発表するはずだった友達が欠席していても、一人で大観衆の前に立つ決意をした。そして、2年生の前で立派に発表をやり遂げた。自分が興味を持ち、繰り返し調べ抜いたことを他人に話したくなることは必然である。その結果立派に発表する経験をし、それが自信へと繋がった。2年生の前で立派に発表したことに自信を持った女の子は、本実践後には、毎日発表することができるようになっていた。同じように、表現することに自信を持つことによって、たくさん発表するようになり、自己表現能力を鍛える機会が増えた子どもが多くいた。

また、子どもたちには、資料を工夫して活用するプレゼンテーション能力も身に付いた。クイズやランキング表、ペープサートや紙芝居を駆使して、分かりやすく、楽しく発表する経験は、今後の学校生活や社会生活にも十分活かせるものである。実際、現在4年生になった彼らは、日野川探検の発表会において、工夫したプレゼンテーションの案を、グループで夢中になって出し合っている。

そしてまた、子どもたちの多くは、国語科などの授業においても、相手が聞き取りやすい話し方をすることができるようになった。本実践では発表練習を含め、計3回の発表の機会を与えた。その中で彼らはお互いにアドバイスを送り合い、声の張り方や、話すスピード、はきはきと話す技術を学んできた。

「大勢の人に自分の調べたことを広めたい！」という思いや、異年齢の人々の前で話すことへのプレッシャーが、彼らの話し方を変えていったと思われる。

IV おわりに

『小学校学習指導要領解説 国語編』に記載されている、第3学年、第4学年における「A話すこと・聞くこと」の指導事項において、次のように記述されている。「(1)話すこと・聞くこと的能力を育てるため、次の事項について指導する。ア 関心のあることなどから話題を決め、必要な事柄について調べ、要点をメモすること。イ 相手や目的に応じて、理由や事例などを挙げながら筋道を立て、丁寧な言葉を用いるなど適切な言葉遣いで話すこと。ウ 相手を見たり、言葉の抑揚や強弱、間の取り方などに注意したりして話すこと。エ 話の中心に気を付けて聞き、質問をしたり感想を述べたりすること」⁷⁾

これらアからエの指導事項は、総合的な学習の時間において指導することのできるものばかりである。本実践においても上述の指導をする機会は多くあった。

アの事項は、探究2において、国語科の「話を聞いてメモをとろう」の単元と関連させることによって指導することができた。子どもたちは日野の自慢できる事象の中から自分の興味があるものを選び、その博士になるために、ボランティアティーチャーからお話を聞いた。国語科と関連させたことによって、子どもたちは意識的に短い言葉でメモをとったり、見出しを付けたりすることができていた。

イの事項は、国語科の「インタビューをしよう」の授業において指導できたことだった。子どもたちは、矢島さんなどのボランティアティーチャーに、丁寧な言葉遣いで質問することができていた。また、発表の時には、2年生にも分かりやすい言葉を選んで分かりやすい発表を心がけることができていた。

ウの事項のように、発表と練習を繰り返す中で、発表原稿の棒読みではなく、抑揚や強弱のついた話し方ができるようになってきた。

エの事項のように、他のグループの子どもたちの発表を聞き、質問をしたり、感想を述べたりする活動をしてきた。

このように、国語科で指導すべき事項は、総合的な学習の時間の学習過程においても指導できる内容となっている。国語科との関連の仕方は、多様に存在するだろう。例えば本実践では、活動を行なっていく中で、必要性に駆られて国語科「わたしたちの町の行事をしようかいしよう」の授業を行なった。つまり、総合的な学習の時間の途中に国語科の授業を組み入れた形であった。この他にも、「わたしたちの町をしようかいしよう」の授業をきっかけとして、総合的な学習の時間での活動を行うことも可能である。この単元には、町の行事を子どもたちが調べる活動も組み込まれている。この教科の学習の過程において、自分たちの町の行事について、主体的な活動を繰り返し広げていったとしても、国語科で身に付けたい力を養える、実のある総合的な学習実践となるはずである。

学校によっては総合的な学習の時間を中心に置いて教科等との関連を図ることにより、生きる力と確かな学力を身に付けさせることを目的としたカリキュラム編成をしている所もある。しかし、多くの学校では、未だに総合的な学習の時間が国語科や算数科の補習の時間に充てられたり、運動会などの行事の練習時間に替えられたりしている。それは決して教師の怠慢とは言い切れず、総合的な学習の時間のやり方が分からなかったり、教科等で教えるべき内容が、割り当てられた時数では教え切れなかったりするケースが圧倒的に多いと思われる。そのような学校では、質の高い総合的な学習の実践は行われず、したがって、ますますその時間の必要性が失われていく。当然、総合的な学習の時間を効果的に生かした学校カリキュラムの開発も行われず、わざわざ研修がされることもない。では、我々教師はどうすればよいのか。

総合的な学習実践において十分に成果を上げていない学校の教師にとって、大切になってくるのは発

想の転換である。総合的な学習の時間があることによって、教科等にかけられる時間が減り、そのために教科等の学習がなおざりになってしまうと考えている教師は、実際に多くいる。しかし、実はそうではない。むしろ、総合的な学習の時間は、教科等の授業時間を効率的に濃縮しつつ、実感を伴った学力を身に付けられる時間である。例えば本実践では、国語科「わたしたちの町の行事をしようかいしよう」にかかる時数を、約10時間分縮減することができた。この国語科単元には、自分たちの町の行事について調べる活動も時数に組み込まれていたが、その部分を総合的な学習の時間中に行なっていたからである。よって、総合的な学習の時間は教科等に割り当てられる時間の妨げになることなく、効率的に国語科の授業時間を減らすことができた。また本実践では、国語科の時数を削減しつつも、子どもたちは実感を伴った学力を身に付けることができた。子どもたちの多くは、自分たちが主体的に調べてきた日野の自慢を、何としても上手に発表したいと思っていた。「2年生に、ちゃんと伝わるかな」と心配していた子どもたちは、国語科のその単元を、必要性に駆られながら学習することができた。そして発表会後には、2年生の子どもたちから「すごく分かりやすかったし、おもしろかった」「3年生、すごい」という感想をもらうことができた。「分かりにくい言葉は、はじめに説明しといたからよかったんやと思う」と、国語の教科書に載っていたことを思い出して、振り返りの時間に発言する子どもがいた。必要性に駆られて教科の知識・技能を学び、それを発表に生かすことによって、教科の学習の大切さを実感できたのである。

総合的な学習の時間は、子どもたちが課題解決に向けて、能動的に活動していく時間である。何とか課題を解決したいと考えている子どもたちは、そのために必要な力を、何としてでも身に付けたいと思うだろう。そんな中で身に付けた知識や技能は、受動的に教授されたそれとは、習得の度合いが全く違うものとなる。子どもたちは、我々教師が教えたことを、全て習得して大人になっていくわけではない。必要性に駆られて学んだ教科等の内容こそが、子どもたちの生きる力になっていく。したがって、総合

的な学習の時間は、教科等において確かな学力を身に付けるためにも重要なものになってくるのである。

さて、総合的な学習の必要性を感じている教師は、そのように感じていない同僚にも、その時間の大切さを伝えなければならない。そのためには、まず、自分が先陣を切って、総合的な学習の実践のイニシアチブを取る必要があると考える。

ここで、本実践で発表会を参観した保護者の方々の感想カードを紹介する。「本当に楽しい時間でした。日野にずっと住んでいた私でも、『へー』って思うことがたくさんありました。」「日野出身ではない私には、今日はすごくいい勉強になりました。」「〇〇が大きな声でしっかりと発表できていたことに驚きました。どんどん、成長していくものなんですね。」

日野小学校も、総合的な学習の時間の研修が未だかつてされておらず、他の行事や教育活動の忙しさによって、その時間がなおざりにされてきた。しかし、子どもたちの良き成長を目指して行なった本実践は、保護者の方々にも少なからず影響を与えるものだった。また、ボランティアティーチャーの方々も、日野の自慢について子どもたちに教えることにやりがいを感じていたようだった。どの方々も、「来年も、是非協力させてもらいます」「もっと上手に説明できるようにいろいろ（具体物を）作っとくわ」などと言い、本実践にたいへん好意的であった。また、学校評価において、3年生の行なったこの地域学習は高く評価されたのである⁸⁾。これに伴って、学校全体が地域学習を核にした総合的な学習の時間を模索していく方向へと動き出した。3年生では「日野の自慢を広めよう」、4年生では「日野川の自然について調べよう」、5年生では「米作りの一年間を学ぼう」、6年生では「日野の歴史学習」を、総合的な学習の柱としてそれぞれ位置づけて実践している。

課題は山積している。総合的な学習の実践をすることに消極的な教師は少なくない。質の高い総合的な学習実践をするためには、綿密な計画や地域との連携、子どもたちへの支援などに多大な時間と労力がかかるためである。しかし、総合的な学習の時間における実践を進めて行く上で、上手く教科等と関連させることができれば、それらの教科等で養うべき学力を、容易かつ有効に身に付けることができる

のもまた、上述した通りである。早急に必要なのは、総合的な学習の時間の研修である。総合的な学習と教科等との関連の仕方や、総合的な学習実践で身に付けられる力を共通理解した上で、教師たちが協同で学校のカリキュラムを開発する必要がある。総合的な学習だけではなく、全ての教科等を含めた学校の特色あるカリキュラムを開発し、実践を積み重ねていくことによって、多くの教師が総合的な学習の時間の大切さを実感し、子どもたちの生きる力を育むことができるだろう。

引用文献・参考文献

- 1) 文部科学省 『小学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編』 2008年、p.4-5
- 2) 同上書、p.5
- 3) 日野小学校の研究テーマは「豊かな自己表現能力を身に付けた児童の育成」である。本校における「豊かな自己表現能力」とは、「自分の思いを分かりやすく他者に伝える力」であり、本実践もその力を身に付けることを目標にしたものである。本校の校内研究の概要は、以下に記す学校ホームにおいて閲覧可能である。
<http://www.rmc.ne.jp/hinosh-shiga/>
- 4) 東京書籍 『新しい国語三 上』
2011年、p.60-63
- 5) 東京書籍 『新しい国語三 下』
2011年、p.138
- 6) 同上書、p.87-95
- 7) 文部科学省『小学校学習指導要領解説 国語編』
2008年 p.61
- 8) 日野小学校では、年度末に全児童の保護者向けに学校評価に関するアンケートを実施している。アンケート項目の中には、「日野小学校が誇りを持つことができる教育活動には、どんなものがありますか。」というものがあつた。その項目の欄に、たくさんの保護者が、「3年生の日野の自慢を広める活動」というような記述をした。「3年生が地域に出て、日野の自慢できるものを探す活動は、日野に誇りを持つことができる子を育てる、すばらしい教育だと思います。」といったコメントもあつた。